

心理学者さんごめんなさい

『「心理テスト」はウソでした。
受けたみんなが馬鹿を見た』

村上宣寛 著
定価 1575 円(本体 1500 円+税 5%)
日経 BP 社 ☎03-3238-7200



坂田三允

日本精神科看護技術協会・専務理事

巷には心理テストがあふれている。人生に成功するために、あるいは恋愛を成就するためにどうすればよいかを考える第1歩として、まずは心理テストをやってみようというわけだ。仲間うちで「ああでもない、こうでもない」と言いながら、それをやるのは結構楽しいかもしれない。会話が盛り上がり、ひとときの社交の場を演出するにはもってこいの道具にもなり得るだろう。だが、心理テストによって自分の将来が決まってしまうとなったら、楽しい気分などどこかに吹き飛んでしまうに違いない。

本書で検証されるのは、そのような入社試験や適正検査に用いられる心理テストの類である。「就職、カウンセリングなどの機会に、心理テストを受ける人は年間100万人以上、もしかすると500万人程度に達するかもしれない。(中略)ほとんどの人は神経質に考えないが、心理テストの結果によっては人生が左右されることもある」と、本書の前書きには述べられている。

1億2000万人の人口で500万人というのはちょっとオーバーな気もするし、第1章に血液型人間学があるのはいただけないが、入学試験でクレペリンテストを受けさせられた身としては、たしかにかなりたくさんの人が心理テストを受けているであろうことは想像に難くない。テスト業界は、一大産業になっているのだ。しかし、心理テストはそもそもどれぐらい正確に受けた人のことを把握できるのだろうか。

ロールシャッハ・テストの章を見てみよう。1984年の日本心理臨床学会第3回大会でのシンポジウムが再現される。そのシンポジウムは「あらかじめ、話題

提供者に事例のロールシャッハ・プロトコルを送り、各自の意見をごく簡単なメモにまとめ、相互間にメモを交換しておき、それ以外は予備的な情報交換せず、直接シンポジウムで話題提供をしていただき、それをもとに討論を展開させる」というものであった。

被験者は死刑になった誘拐犯であり、拘禁反応を起こしたためロールシャッハ・テストを実施したが、基本的には正常な人であるという。

結果は、「斉藤は“性倒錯”、馬場は“抑うつ感が強く、男性性不全、アルコール依存、対人恐怖のある神経症者”など、秋谷は“性的な問題を抱えた強迫神経症者”と、それぞれ見当外れな結論を下し」という。著者はアメリカのテスト研究者アナスティシの言葉「インクのシミが明らかにするのは、唯一、それらを解釈する検査者の秘められた世界である」を引用して、このテストの当たらないさを指摘する。

さらにいくつかの研究結果が報告され、「さまざまな研究を総合すると(中略)半分は信頼できるが、半分は信頼できない。すべての変数を総合すれば、ロールシャッハ・テストの結果は検査者ごとに異なり、文字どおり“当てにならない”ということになる」と述べる。

病院でも、心理テストはよく行なわれているが、いくつもの質問に答えなければならないために、患者さんはとても疲れることも多い。“当てにならない”結果を出すために患者さんたちの貴重な時間が費やされているのだとすれば、それはとても残念なことだ。

もし、本書のほうが間違いであるというなら、心理学者の方々はぜひ反論をしてほしいと思う。 🔥

さかたみよし◎このコーナーは、本年からほんの少しリニューアルいたしました。編集部が精神看護に関係のありそうな書籍を選び、それを読んで書くことになりました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。